

沖田総司哀歌

森満喜子

新人物往来社



〈著者略歴〉

森 満喜子（もり・まきこ）

大正13年横浜市生まれ。

昭和20年大阪女子高等医専（現・関西医大）卒。

昭和23年より昭和51年まで大牟田保健所勤務。

著書『沖田総司哀歌』『沖田総司抄』『沖田総司幻歌』

『定本沖田総司—おもかげ抄』『沖田総司落花抄』

現住所 熊本県荒尾市下井手 188 大場医院

沖田総司哀歌

昭和四十七年十一月二十日 第一刷発行
昭和五十二年 八月一日 第九刷発行

著 者 森満喜子

発行者 菅 英志

発行所 新人物往来社

東京都千代田区丸の内三—三—一（新東京ビルディング） 都一〇〇
電話東京（二—二）三九三—（代答） 振替東京六一—五一六四三

印刷所 日本製版株式会社

製本所 大観社製本

著丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

目次

とし女壬生ばなし

五

芹沢鴨の日記

三

千鳥

一五

くちなし

一八

うなぎ

一九

五月闇

二五

あながき

二六

装丁・倉橋三郎
さし絵・大槻美智子

沖田総司哀歌

とし女壬生ばなし

ま、どうぞお茶でもお上がりやしておくれやす。ようまあ、あんたはん、お若いのにこんな年寄りの昔話、よう聴きに來てくれはりましたなあ。おおきに。あの頃の新選組のことというたらこの年になつてもはつきり昨日のことのように覚えてまっせ。

うちが壬生^{みぶ}の八木様のお屋敷に上がりましたのは、数えの十の時どした。うちの家は丹波の山奥で、お父はんは木樵^{きせう}をしましたんどすけど、子が多うてその上、お母はんが弱かつたさかいに、うちは口べらしのために年季奉公に出されたいうわけです。

八木様には、旦那さん、御寮^{ごりょう}さん、その頃五つと三つの坊^{はふ}。うちは下働^{くだく}きと坊^{はふ}の方のお守りが仕事どした。上女中のおるいはん、およねはん、下男の作平さん。八木様は壬生の大きな郷士で、代々つづいておられる由緒あるお家柄とか。御家族皆様もの静かでお勤めも楽やと喜んでおりましたが、忘れもしまへん、うちが十五になった時、そう、文久三年の三月どした。江戸から仰山^{ぎやうざん}、お侍さんたちがこの壬生へやって來やはったんどす。八木様はじめ南部様、前川様、新徳寺など、壬生の広い建物はみなこのお侍さんがお宿にしやはって、そのにぎやかなこと、こわいこと。うちらがあつけに取られて、どんなことになるのんかいなあと思つていましたら、十日ほどたちましたやろか、今度は潮の引くようにさつと居んようにはりました。何でも江戸に引

き揚げて行かはったとやら。やれやれ、これで静かになった……思うたら、まあどうですやろ、十三人だけ、しかも八木様に泊まってはったお人たちだけ残っておいやすのどすえ。うちには何にもわからしまへんどしたけど、そのお方たちは大きな声で話をしたり、どこやらへ出かけたりしてはります。お居やす所は、母屋からずっと離れたお庭の中の離れどすけど、夜やら大きな声で歌うとうたり、詩を吟じたりする声もきこえました。それはまあ、ええとしても、うちの仕事のふえたこと。今はこんなに肥えてますけど、その頃は、色は黒うてカリカリにやせて、年よりはずっと小そう見えました。まるで椎の実や……と家に居た頃は口の悪い兄からよう言われてました。小そうてチヨコチヨコするさかい、使いやすうおすのやろ。うちの名はとしといひますけど、この十三人のお待さんもうちを氣やすう、

「おとし」

「としちゃん」

と、まるで自分らの小間使いのように使わはります。はじめのうちはこおうて、何でも、

「へえ」

「へえ」

と、お使いやら何やら、お言いやすこときいてましたけど、何やのちにはあほらしなって、風船みたいにふくれることもおした。この十三人の御様子を、ちよっとお話してみまひよか。まず近藤さん、しっかりした、口の大きいお方でした。ニコニコしてはる時はとても優しいお顔どす

けど、ふだんはこわい感じでした。

土方はん、眼えの涼しい、髪のきれいなお方でしたけど、あまり笑はらへんし、きびしいお顔つきがこおうて、近藤さんより近寄りにくい気がしました。山南敬助はんは、いつもゆったりとした感じの、愛想のええお方でした。ちょっとお使いを頼まはつても、このお人はきまってお駄賃くれはりました。井上はんは、ほんまのお年はお幾つやら、十三人の中で一番お年のように、四十くらいには見えましたが、もっとお若うおしたかもしれまへん。綿の綿入れ着てはって、刀さしていやはらへなんたら、まるで老百姓さん。おとなしい、ええお方でした。

その外、原田はん、藤堂はん、永倉はんなど、若うて元氣のええお方でした。うちの一番好きなお方は、沖田はんでした。その頃のお仲間の中では一番お年若で、まだ大人になつてはらへん、うちらと同じ子供みたいところのあるお人で、その頃、やつと二十歳くらいになつてはりましたやろか。ま、このお方のことは、ぼちぼちお話しまひよな。この沖田はんのことを、うちは、あんたはんにお話しとうて……。年甲斐もないと笑わんといっておくれやつしや。一べん、好き、と思うたお方のことは、幾つになつても忘れるもんやおへん。な、そうどすやろ。

その外、芹沢はん、こわいお方でした。昼のうちからお酒飲まはつて、鉄扇でよう人をたたかかります。うちはもう、このお方のお姿、チラッとするなり横つ飛びに逃げましたえ。芹沢はんの家来みたいな新見はん、野口さん、平間重助はん、平山はんやら居やりました。

間もなく、お屋敷の入口に「新選組」という木の札がかりまして、——この人たち、新選組

いうものにならあったんやなあ——と思いましたが、今までと一向に変わらしまへん。やっぱり、わいわい大きな声で話したり、外へ出て行かはったりします。そのうち、人数も、だんだんふえて来まして、制服もできました。

浅黄麻に、袖口を白う山形に染めぬいた、四十七士の討入りみたいになけったいなお羽織と、小倉の袴どす。お金回りも次第に良うならはりましたんやろ、はじめみたいにお百姓のようななりのお方は居やはらへんようになって、みなござっぱりとしてはります。

毎日のように制服を着て、赤地に白で誠と染めぬいた大きな旗を立てて、京の町を行列して歩かはります。市中巡察たいうもんらしゅうおす。はじめの十三人のお人たちはみなその上役につかはりまして、家来の隊士を引き連れて行かはんのどす。

お賄いの方はうちの台所で一緒どすけれど、新選組でも下男を二人雇はりました。お上からお手当も出ましたんどすやろ、大きなお釜やお鍋もそろって、三度三度のお食事の仕度はそら仰山なもんどした。

広いお庭の中ほどに、久武館とかいう剣術の道場もでけまして、朝早うからここでお稽古したはります。慣れへんかった間は、その掛声にびっくりして、下の勇之助ぼんやらおびえて泣き出さはりました。そやけどだんだん、それにも慣れまして、威勢のええ竹刀たけとうの音や掛声かけこゑのきこえて来るのが、朝の雀や鳥の声と同じになって、きこえへんと何や淋しゅう思うようになりまして。

人の話では、あの年の若い沖田はんが、一番剣術がお強いとか。人は見かけによらんもんどすなあ。いつも、よう冗談言うて笑うてばかりいやはお方ですけど、何や、剣術師範頭とか、大そうなお役についてはるのやそうですて。そやけど、このお方剣術のお稽古よりも壬生寺の広い境内を走り回って遊ぶほうがお好きらしゅうて、井上はんなどが、よう呼びに行かはりました。

ある時、ちょうど通りかかったうちに、井上はんが、

「稽古の時間だ。沖田を呼んで来てくれないか」

と言わはりますので、

「へえ」

と、軽うお返事して、おおかた壬生寺やろ思うて急いで行きましたら、やっぱり居やりました。大勢の子供たちと一緒に——勇ぼんも居てはりました——鬼ごっこしたはるんどす。鬼になった子が沖田はんをつかまえようとしますけど、足が早うてなかなかつかまらはしまへん。笑いながら走ってはるかわいなお顔見えますと、まるでぼんぼんのように、この人がどうして剣術師範頭やるか？ と疑いとうなるほどした。

うちが大きな声で、

「沖田はん、井上はんが呼んではりませ。お稽古やて」

と言いますと、

「あ、おとしさん、もうちょっと、ちょっとだけ」

と、走りながら片手拝みに拝まはります。それきりなかなか来やはりまへん。

「うち、知りまへんえ。井上はんに言いつけまっせ」

帰ろうとしますと、

「待って、おとしさんが私をつかまえたら帰る」

と言わはりますので、

「ようし」

と、ま、十五というても色気も何もあつたもんやおへん。短い木綿の着物に藁草履わらざうりをはいたうちは、一生懸命沖田はんをつかまえようと走りました。小さい時から丹波の山中を走り回って暮らしたうちどす。足には自信がおしたけど、沖田はんの疾はやいこと、疾いこと、なかなかつかまってくれはらしまへん。うちはもう口惜しゅうて、脇目もふらず追いかけていますと、いつの間に來やはったのか、井上はんがしかめづらをして、

「何だ。ミイラ取りがミイラになったか」

と言うてはりますやないの。とたんに沖田はんは、ピタッと足を止められ、いたずらを見つけた子供のようにしょんぼりして、

「あ、今すぐ帰ります」

と、真っ赤な顔をして井上はんと一緒にお帰りやした。こういうことはようおした。うちがお迎えにゆくなり、

「おとしさんか。いやだよ」

と言うて、指を顔にあてて舌出してあかんべえしやはって、一向お遊びをやめようとしやはらしまへん。もうおかしいやら、くやしいやら、うちも一緒に遊びたいのはやまやまどすけど、朝暗いうちから起きて寝るまで、ちよっとも自分の体になることのおへんうちどす。もう、何や忙しゅうて、忙しゅうて、そやさかい思い切り遊んでいやはる沖田はんがうらやましゅうてかないまへんどした。

劍術のお稽古で、どないしやはるのやろ、一ぺん見ようか思うて、沖田はんが帰らはってからすぐ、やめといいたらええのに、久武館の武者窓によじ登って、のぞいて見たんどっせ。ちっちゃい体どしたさかい、背^せ伸ばしたくらいでは見えへんのどす。大勢の隊士の方が面、籠^こ手をつけて、大きな掛声を掛けて、稽古をしてはりました。沖田はんは、正面でしばらく見てはりましたけど、やがて御自分も劍術のお道具つけて道場の真ん中に出て来やはって、一人の隊士と向かい合わりました。

「ヤアッ!」

沖田はんの口から大きな掛声がひびいた時、うちは思わずしっかり握っていた武者窓の枠から手をはなして、ドスンと下へ落ちてしまいました。あんな大きな声が、あのぼんぼんみたいな人からよう出るなあと、うちは痛さも忘れてぼんやりしてました。

その日の夕方、井戸ばたでお米といでいますと、稽古着のままの沖田はんが笑いながら、



「おとしさん、痛かったろう」

と、言わはりました。びっくりして、

「え？ 知ってはりましたん。あんなに御熱心にお稽古してはったのに」

と言いますと、おかしそうに笑って、

「おとしさんの尻餅の音の方が、私の掛声より大きいからね」

どすねんで。ま、その憎らしいこと、ほんまに沖田はんは、人をからかう名人どした。

こわかったのは芹沢はん。それにいやらしいことに、屯所とんじょに女の人連れて来て泊めはるのどっせ。芹沢はんの御家来衆も真っ昼間からそんなことをしはります。うちはもういやらしゅうていやらしゅうて、つとめて見て見ん振りをしてましてん。御寮さんもまゆを寄せて、

「困ったもんや」

と、ため息ついていやはりました。

ある夕方のこと、うちが井戸ばたでお菜を洗うてますと、芹沢はんがいつの間にか後ろに立っていて、酒臭い息をしながら、

「どうだ、おとし、わしと一緒に来い。かわいがってつかわすぞ」

と言うなり、いきなりうちの手をぐいっと握らはりました。

「あっ、何をしやります。御寮さん呼びますえ」

と、うちは恐ろしさに氣の遠うなる思いでやっと言いましたが、芹沢はんはギラリと眼を光ら